

『帝京大学宇都宮キャンパス研究年報人文編』第十八号（二〇二二年十二月） 抜刷

日本近代における軍神像の変遷

山室 建徳

日本近代における軍神像の変遷

山室 建徳

本稿は、平成二十四年四月に、韓国の壇国大学日本研究所で行われた学術シンポジウムでの報告のために準備した論文である。韓国語に翻訳されたものが、同大学の紀要『日本學研究』第三十七輯（二〇一二年九月）に、日本語と英語の要約文を附して掲載されている。多くは拙著『軍神』に依拠しているが、「はじめに 物語としての歴史」は書き下ろしであり、他の部分もその後の知見を取り入れて書き直している。

このように、以下の文章は『軍神』と重複する部分が多く、かつ『日本學研究』に載せられた論考が正式なものである。にもかかわらず、ここにあえて発表するのは、韓国との学術交流の一例を紹介したいと思いついたためである。このために、拙稿に対して韓国側から事前に寄せられたコメントの骨子と、それに対する当方の書面による回答（当日コピーが会場で配布された）、そして当方がメモした当日の会場でのやりとりをつけ足し、韓国側の反応を知る手がかりとした。なお、『日本學研究』に載せられた論文の日本語原稿の公開には、

壇国大学側に了解をいただいた。ご厚意に感謝したい。

当日のプログラムは以下の通りである。

第三十回 壇国大学校日本研究所 学術シンポジウム
日時 二〇一二年四月十八日（金曜日） 午後一時二十分～
五時五十分

企画テーマ 近代韓日における戦争英雄像の創出と変容

午後一時五十分～二時三十分

唱歌と戦争英雄について

報告者 李権熙（壇国大学校 東洋学研究所）

指定討論 全成坤（高麗大学校 日本研究センター）

午後二時三十分～三時十分

近代啓蒙期の読本類教科書を通じて見た歴史人物に関する
教育の志向と限界

報告者 許在寧（壇国大学校 教育大学院）

指定討論 韓京子（慶熙大学校 日本語学科）

午後三時三十分～四時十分

日本近代における軍神像の変遷

報告者 山室建徳（帝京大学 経済学部）

指定討論 李炯植（嘉泉大学校 亜細亜文化研究所）

午後四時十分～四時五十分

勝者としての民族英雄の形象化とその亀裂

報告者 宋明珍（西江大学校 国語国文学科）

指定討論 蘇榮炫（延世大学校 国学研究院）

午後五時～五時五十分

総合討論

主催者の話では、出席者の九割は日本語を理解するのとこのことであった。報告と討論は韓国語で行われたが、山室の報告のみが日本語で行われた。以下の本論の内、「はじめに 物語としての歴史」と「鏡としての軍神」と「おわりに 軍神の三類型」を読み上げ、他は簡単に触れるにとどめた。質疑応答は山室に個人的な通訳がつき、山室が答えた後に韓国語でその内容が通訳された。

一 はじめに 物語としての歴史

「サア・ウォルター・ロオレイが、或る日、窓から街の出来事を眺めてゐた。暫くして他の目撃者がまるで違つて同じ出来事を報告したのを読み、書いてゐた歴史の原稿を焼いて了つた。この有名な逸話も、だば沙魚ハゼをしやくつてゐる歴史家には、氣違ひ染みた笑話に過ぎまいが、彼の驚きや悲しみは全く健康であります」（小林秀雄「歴史と文学」(1)）。

小林秀雄はここで、歴史叙述を断念したサー・ウォルター・ローリー (Sir Walter Raleigh) を現在の日本で普通こう表記する) の「驚きや悲しみは全く健康」だと共感しています。私も同じ思いを持ちます。自分にはたしかにこう見えた事柄も、他人からはまったく異なつて見えてしまうのは、よくある事です。しかも、史料として後世に残るのは、多種多様だったであろう目撃談の中のごく僅かです。ローリーと同様に日々の生活の中で気づいて良い事柄なのに、後世の我々は目の前の史料と過去の真実との乖離にあまりにも鈍感ではないでしょうか。そもそも、この逸話をローリー自身を読んだら、実際とは違つたと反論したかも知れません。この文章自体もあくまで「逸話」であつて、「真

実」とはほど遠い可能性がないとはいえないのです。

「歴史の真実」というものが確固として実在し、それを人々が正しく把握したり歪曲したりするのでありません。客観的な「真実」は起きた瞬間に消え去り、永遠に闇の中に葬られてしまします。「歴史」とはすべて、目撃者が主観的に再構成した情報に依っています。手がかりのほとんどは、特定の書き手の記憶を文字化した記録の中にしかありません。映像や音声の記録があつたとしても、それはごく限られた時間に特別の視点から録画・録音された場景に過ぎないのです。記録として残されたのは、実際に起きた出来事の中のごく僅かについての偏った見方だけです。ほとんどの事態は、記録すらされないのです。

それゆえ、私自身も小林秀雄が描いたローリーと同じように、「真実の歴史」を語ることは断念せざるを得ないと思っています。史料をたくさん集めれば歴史の真相に近づけると思い込むのでは、「だぼ沙魚をしやくつてゐる歴史家」になるだけです。しかし、ローリーとは異なり、歴史叙述そのものを諦めようとは思いません。断念していないのは、「他の目撃者がまるで違つて同じ出来事を報告したのを読」むというレベルで、歴史を振り返ることです。文章となった世界、情報化された空間を、独立した領域と意識して見続け

たい。それが虚構に過ぎないとして歴史探究を放棄するのではなく、当時の人々がそうとらえたいと思つた物語、見たつもりはいきさつを探ってみたい。現実に起きた出来事を直接見聞はできないが、そこに当時の人々の意識という光が投影されて、その光によつて紙の上に映し出された影絵を見極めたいのです。

それでは、そんな「真実」とはほど遠い「歴史」を振り返ることに、どんな意味があるのでしょうか。そこから、このような歴史があつたというのでしょうか。少なくとも信じていると見られたい（少なくとも信じているという事実だけは明らかにできます。そこには、回想録のように個人が振り返る歴史の場合も、『聖書』のようにキリスト教という同じ宗教を信じる者が共有する歴史もあるでしょう。そしてここでは、同じ言葉や文化を持つ日本という国の「歴史」を考えてみたいわけです。端から見て正しかろうが間違つていようが、共通の記憶を持つことで人々は結束します。身近な例を出せば、家族がその典型です。父母が、伴侶が、子供がなぜかけがえない存在なのか。その理由をはっきりしています。大切な思い出つまり「歴史」をたくさん共有しているからです。同様に、共通の歴史を経験することで、国民としてのまとまりが形作られます。このため、同じオリンピックのフィギアスケート競技

でも、キムヨナの活躍を応援するか、浅田真央のがんばりに感動するか、国が異なれば違う出来事に見えてくるのです。

このようにして歴史を見る場合、日記や手紙あるいは機密文書のように、同時代にはごくわずかな読み手しかいなかった特殊な史料よりも、新聞や雑誌のように多数の読者を抱えたありふれた材料の方が大切になります。より多くの国民に理解され共感されることを期待して、文章が書かれているからです。そして、今日の国民の多くがオリンピックをテレビで見えるように、過去の国民は戦争を新聞・雑誌などを通して知りました。前線の将兵を除いて、大多数の日本国民は、昭和二十年（一九四五）三月十日以降本格化する無差別空襲が始まるまで、戦争を直接経験しませんでした。戦争はマスメディアの情報を通して、イメージするものだったのです。その意味でも新聞雑誌は重要な史料です。通常の歴史分析では、珍しい史料の方が重視されますが、ここではそうではありません。また、事の真相よりも過去の日本人が何を考え、どう感じていたかの説明が中心となります。したがって、同時代には秘密であった史料を駆使し、対立しあう勢力の内部動向を同時に把握できるという、後世になって初めて可能な視点から歴史を見るというやり方も、ここでは取

りません。このような観点から、日本国民の歴史物語として「軍神」という問題を考えてみたいと思います。

二 鏡としての軍神

今日の日本ではほとんど忘れ去られていますが、敗戦以前の日本では「軍神」として多くの日本国民から賞賛を浴びた軍人がいました。これらの軍神は、軍部や政府の認定によって誕生したわけではありません。新聞や雑誌で期せずしてそう呼ばれるようになるのが通例です。最初に軍神となった廣瀬武夫の伝記には、「此の尊号は人々が集つて評議して贈つたので無く、所謂天の声則ち天の命であるから、永久に伝へらるゝものであらう」（2）と書かれています。軍神を顕彰する人びとにとっても、軍神に選ばれた基準が何なのかは、はっきりしていなかったわけです。

ここでいう「天の声」の意味を考える上で、興味深い記述があります。アメリカとの戦いで日本側が劣勢に追い込まれた昭和十八年（一九四三）に、ある学生が書いた小説の構想です。彼は後に山田風太郎という著名な小説家になります。この年の五月にアツツ島で玉砕した部隊が、「山崎軍神部隊」と呼ばれるようになったのを聞いた彼は、次のようなあらすじを八月末

の日記に記しています。

山崎部隊は全滅したが、「もし不幸、重傷を受けたが死に至らず、人事不省のまま捕虜となった者があつたら如何」。「彼らは敵の嚴重な監視下に自決の器具なく、やむなく恥じて、舌をかんで続々死ぬ。その中に、例えば―山崎部隊長その人がいたとしたら如何。彼もまた舌をかみ切つたが、敵軍医に発見されてついに死するを得ず、本国に送られる。悶々の捕虜生活。やがて日米血闘の数年去つて両国間に和議が成り、その身柄は日本に送還されることになる」。しかし、「捕虜収容所を脱走。一牧師にかくまわれてさらに数年。ようやく旅費を得て、望郷の志にたえずしてひそかに祖国の土を踏む。志操全く衰えて、ただ日本の山河の中にひそかにその晩年をゆだねようとするのである」。

昭和三十〇年、山崎部隊長の墓の前に茫然としてたずむ一老人があつた。「香煙たえず、その日もまた墓前に泣く少女あり、瞳をかがやかせる少年あり。児童らにその殉忠を訓す老教師あり。ああ、彼はすでに日本の師表となり、英雄となり、神となり、讃仰的となつていたのである」。「苦悶と自嘲と寂寥」が交錯する中、終日そこに立ちつづけた彼は、ついに自決を決意する。「殉忠山崎中将は、昭和十八年五月二十九

日より永遠に日本国民の胸に生きている。その幻影をみずから碎くに忍びない」。「その翌朝、参拝した敬虔の日本人は、墓前にくびれた老醜の一塊を見た。そのからだは醜かつたが、顔にはしずかな微笑が残つていた」。新聞には、次のような三面記事が小さく載つた。「住所姓名不明の一老人が、軍神の墓の前で縊死していた。おそらく自分の人生と軍神の死との差に絶望したからであろう」(3)。

ここに描かれた世界は、軍神という存在を考える上で大切な手がかりを与えてくれます。軍神とは、日本国民の胸の中に生きる栄光であり歴史です。実態はこうであつたというような説明で、打ち碎けるような「幻影」ではありません。軍神の実像と彼らを軍神に仕立てた陰の原動力を求めて、表に現れた虚像を次々に剥いでいっても、何も出てこないでしょう。これから見ていくように、軍当局の仕掛けで軍神が作られたとは言い切れません。軍神は、戦場の真相を覆い隠し国民を戦争へ駆り立てるための、権力者の小道具に過ぎなかつたと決めつける人がいるならば、その人の考え自体が、日本が敗戦した後で作られた「幻影」に過ぎないといえるでしょう。主役は軍神そのものではなく、軍神と同じ時代を生きた日本国民です。軍神は、彼ら

の「幻影」によって息を吹き込まれた存在なのです。そうだとすれば、軍神を鏡にして、戦争に敗北する前の日本の国民意識を照らし出すことも可能となるでしょう。

軍神には三つの類型があります。一つ目は最前線の指揮官として戦死した佐官級の将校です。彼らは部下思いの行動を取って戦死した立派な人格の持ち主として尊敬されました。第二は、戦争の帰趨を左右するよう大きな作戦を指導したことで有名になった將軍たちです。三番目は昭和期になって登場する新しいタイプの軍神です。彼らは集団で自分の命と引き替えに作戦を遂行した若者でした。以下順を追って説明をします。

三 部下に慕われた高潔な指揮官

廣瀬武夫中佐

明治三十七年（一九〇四）二月に始まった日露戦役は、海上での戦いから始まりました。しかし、すぐにロシアの艦隊は、鞏固な要塞に守られた旅順港に立てこもってしまいます。これに対して日本海軍は旅順港の入口が地形的に狭くなっているため、夜陰に乗じて老朽船を沈没させ、ロシア艦隊を封じ込める作戦をと

ります。二月二十四日未明に五隻の船によって、この作戦が決行されました。しかし、ロシア側に発見されて砲撃を受けたために、目的を達する前に船は沈没・座礁してしまいました。その概況と船に乗り込んだ七十七名の階級氏名が、二十七日に公表されました。この頃はまだ本格的な衝突は起きておらず、戦死者の数はさほど多くはありませんでした。そのために、閉塞作戦に限らず、実戦に参加した将卒の一人一人の経歴や活躍ぶりが、こと細かく紹介されるような状態になりました。そのなかでも、閉塞作戦がとりわけて紙面を大きく割かれたのです。敵に反撃するすべを持たぬままに、ロシア軍の目の前まで行くという大胆な作戦にこそ、日本人が世界に誇るべき特質が、もつとも良く体現されているとみなされたからでした。たとえば『国民新聞』は「閉塞隊の大胆なる行動は、我が武士的精神を、事実上に發揮し、我が国民的性格の最も精華ある部分を表彰して遺憾なきもの」と述べ、「我が国民が、衷心感謝の情を以て、世界の列国が、嘆賞の念を以て、此の快報を迎ゆるもの、決して其故無しとせざるなり」といいます。それゆえ、結果は予期通りでなくても、「此の一挙、以て敵を氣死せしむるに足る」と評価しています(4)。

この作戦で沈められることになっていた五隻の船に

は、将校が一人（中佐一名、少佐一名、大尉二名、中尉一名）づつ指揮官として乗り込んでいました。その中でも総指揮をとる当時四十四歳の有馬良橋中佐と副指揮者格である三十七歳の廣瀬武夫少佐はとりわけ注目され、彼らの経歴や人となりが雑誌記事の恰好の題材となつていきます。特に廣瀬については、謹厳実直な軍人というよりも、多くの人から愛される快活な好男子であることを彷彿とさせる逸話が数多く紹介されています。彼は一躍全国に知られる人気のある有名人になつたのです。

それから一月後の三月二十九日二回目の旅順閉塞作戦の結果が各紙で発表されました。その中で、廣瀬中佐（戦死により昇進）が、行方不明となつた部下の杉野兵曹長を、船内を三度まわつて探索したが発見できず、ボートに乗り移つた時に敵弾に當つて戦死したことが報告されています。「中佐は平時に於ても常に軍人の亀鑑たるのみならず、其最後に於ても万世不滅の好鑑を残せるものと謂ふべし」というのが、そこでの評価です。

この著名人の戦死に、新聞や雑誌は紙面を大きく割きました。特に目覚ましい活躍をしたとはいえないのに、どこが注目されたのでしょうか。『東京朝日新聞』には「軍神廣瀬中佐」という見出しが掲げられ、「殊

に其戦死は、其部下の一人を救はんとするがために起りたり。部下の一人の死を見るよりも、自ら進んで之に死せり。：中佐が日本武士の魂はこれぞと示したる其行為其死、是既に日本に対する大功なり」（5）と記されています。あるいは、閉塞隊の任務が「既に大勇者に非れば能はず」なのに、廣瀬の行動はそのような「勇に加ふるに仁を以てするもの」（6）とも受けとめられています。つまり、軍人としての戦功よりも、「日本武士の魂」や「仁」を示したと捉えられたために、廣瀬の死は大きな反響を巻き起こしたのです。

廣瀬中佐の霊柩は各地で多数の出迎えを受け、四月十三日に東京で盛大な葬儀が営まれました。葬列は「各戸弔旗を掲し其沿道に人垣つくり一里余の両側を埋に埋たる人々」に見送られています。葬列の勇士たちが「其繕はぬ面に包みがたき悲痛の色を浮めて、胸轟かすべき軍樂の哀譜の中を肅々として進行くさまは、実に崇高の極悲壯の限にして、かかる葬列は東京市民が多く見るを得ざりし処、況んや軍国の民此『軍神』とまで慕ふの人の葬式に於て之を見る、むべなり往々感極て稠人「多くの人」の中に涙を拭ふ髯男の多りし事や」（7）という光景が広がります。式場でも、「満場寂として婦人席より嗚咽の声のみ高かりき」（8）という有様でした。

こうして近代日本で最初の軍神が誕生しました。その特徴は、軍人として特に輝かしい活躍をしたわけではないところにあります。したがって、戦意や敵愾心を昂揚させるような効果を全く伴いません。優れた人格の持ち主である指揮官が、部下を深く思いやりながら死んでいったことに泣くという物語なのです。

橘周太中佐

日本の陸軍は四月二十九日以降南滿洲への進攻を始め、旅順を除く遼東半島を占領します。そして、奉天の南方にある遼陽平野に展開していたロシア軍の主力と、一大決戦を行う作戦を八月下旬から開始しました。日露両軍あわせて三十五万人もの将兵が衝突したこの会戦の結果、日本軍はかろうじて遼陽を占領しますが、力を温存したまま北上したロシア軍を追撃する力はありませんでした。日本側の死傷者だけで約二万四千名（内戦死者五五五七名）にも及ぶような大戦争を、日本はこれまで経験したことがありませんでした。新聞の紙面は戦死した将兵の経歴や人となりを描いた記事で、連日埋められるようになります。こうした悲痛な気分が広がっていた中で、廣瀬中佐に次ぐ二人目の軍神が登場します。遼陽の手前にあった首山堡のロシア軍防御陣地で繰り広げられた攻防戦を指揮して、八月三十一日に四十歳で戦死した橘周太少佐（死後中佐に

進級）です。

彼の場合、廣瀬中佐のように死後直ちに軍神と呼ばれたわけではありません。旅順口閉塞作戦に従事した軍人は数十名に過ぎず、その全員の氏名が新聞に掲載されるなど、注目を浴びる存在でした。これに対して、遼陽会戦は遙かに大規模な戦いであり、橘中佐はその中の一将校に過ぎませんでした。その彼を賞賛する記事が、九月九日以降主な新聞に一斉に載せられるようになります。橘の人となりを紹介するのは、彼と特に親しかったという教育総監部参謀柚原完蔵少佐です。

「彼の軍神と称へらるゝ廣瀬海軍中佐は、其の最後の勇壮なりしが為のみにあらで、其の平素に在つて敬仰すべき事の多かりしを以て人の欣慕を受くること深し、この橘少佐も亦其の平生の性行洵に嘆美すべきもの多く、恰も陸軍に於ける廣瀬中佐ならんと思考せらる」と、柚原は言います。これをきっかけに、橘中佐の模範的な軍人ぶりや、部下に慕われながら戦死したいきさつが、詳しく紹介した記事が載るようになります。そこでは、橘は廣瀬と比較されていますが、廣瀬とは異なり、橘に対する国民的な反響は特に見られませんでした。橘の場合は、海軍への対抗心から陸軍からも「軍神」を出したいという陸軍の意向が働いたように見えます。

しかし、やがて海軍の廣瀬に対する陸軍の軍神として、橋の名は広く浸透していくこととなります。その最大の媒体となったのは、小学校の国定教科書でした。おそらく陸軍と海軍とは対等に扱わなければならないというバランス感覚が、橋を廣瀬と並ぶ軍神に仕立てたのでしょう。彼らの物語は、敵に打ち勝つ景気の良いものではなく、苛烈な攻撃を受けて死んでゆく指揮官の話です。戦意昂揚につながるような明るい英雄譚ではなく、苦難と涙に縁取られた死出の旅の物語です。その中に、日本人のあるべき姿が見出されて、それが後世の日本人にも共感を呼び起こし、二人は軍神として定着したといえるでしょう。橋が軍神となったのが陸軍主導によるとしても、やはり日本国民が好むキャラクターが選ばれたのです。

銅像建設

近代日本最初の軍神となった廣瀬への熱狂は、彼の事蹟を末永く後世に伝えなければならぬという気運を盛り上げました。伝記類や銅像がいくつか造られました。最も著名なのは、東京万世橋に建てられた銅像です。海軍兵学校で廣瀬と同期生だった財部彪（当時は大本営参謀）らが中心となって戦死から六年後に完成させています。台座の高さ七・三メートル、銅像の身長三・六メートルという堂々たる像でした（9）。

この銅像は昭和二十二年（一九四七）に撤去されますが、それまでは東京の名所の一つでした。

また、橋周太の銅像も大正八年（一九一九）二月に二体作られ、彼が校長を務めた名古屋陸軍幼年学校と郷里である長崎県の山の上に安置されました（10）。

ここで興味を惹かれるのは、軍神廣瀬や橋を後世に伝える最も良い手段が銅像建立だと考えられた点です。この当時はまだ神社を建立しようとは誰も考えていませんし、碑文の類よりも銅像だと思われました。本人の姿を忠実に再現した銅像を、屋外に置くことが重要だと意識されたのです。公共の場に歴史を思い返させる手がかりとして巨大な銅像を据え置くというやり方は、明治以降に西欧から導入されたばかりの方法です。それ以前の日本では、詩碑や歌碑などが縁のある土地に建てられることはあっても、人の形をした像が立てられることはありませんでした。俗人の像が全く作られなかった訳ではありませんが、それを公衆の面前に置くという伝統は存在しません。広く一般の人びとの眼にふれるものとして作られた彫塑は、仏像のような宗教関係にほぼ限定されてきました。神道ではそのような伝統はありませんでしたが、大陸から伝来した様式を受け継いだ仏教では、仏像や仁王像のような超人間的な存在が彫刻となっていました。

つまり、明治になってから偉人の銅像が造られるようになったのは、西欧文明の影響を受けて、日本社会の中で個人の存在が、その人の風貌と結びついて強く意識されるようになったことの表れだともいえるでしょう。軍神という存在は、そうした新しい自意識と結びついて定着していきました。

四 現代史を象徴する将軍

乃木希典の殉死

明治四十五年（一九一二年）七月に薨去した明治天皇の靈柩が、宮城を出発したのは九月十三日の夜のことです。先頭から最後までが通過するまでに一時間半もかかったという大葬列でした。その夜は東京の青山で大喪の儀を行い、翌日未明に御陵となる京都桃山に向けて出発する手はずになっていました。日本中が近代国家建設の父ともいべき天皇の葬列に思いを寄せていたこの夜に、乃木希典とその夫人は自宅で自決しました。乃木希典は日露戦役で、多大の犠牲者を出しながら旅順を攻略した将軍として有名でした。乃木夫妻が明治天皇に殉死したことは、その夜の内に新聞の号外によって報じられます。

この報道は人々の間に大きな驚きを呼び起こしてい

ます。奥保鞏元帥は、これを伝えた副官に対して「そんな馬鹿なことがあるものか」と一言の下に叱咤しましたが、詳細を伝えられると「顔色眞青となり平素沈着の元帥も全く喪心の体」になってしまったといいます（11）。翌十四日早朝、政友会代議士だった「野田大塊」「宇太郎」子は顔を洗って居ると、丁度八百屋の小僧が来て『乃木さんは昨晚自殺した相です』と云つたので、『何を馬鹿な事』と矢庭に拳骨を一つ喰はして追ひ払つたが、小僧は大に憤慨して店へ帰つて、号外を持つて来て突付けた」（12）といひます。後世の日本人は、何の驚きもなく乃木希典の殉死を歴史の一コマとして、当たり前前に受けとめています。しかし、これを初めて知った同時代の人間にとつては、他人から話として聞くだけではとても信じがたい、意外の出来事でした。

明治天皇の下で文明開化を成し遂げたこの日本では、殉死など遠い昔に廃れた出来事であり、よもや高位高官の中から古式に則り切腹する者が出るなどとは、誰にも想像できない事態でした。それゆえ、「すべての人は、すさまじい電光にでも打たれたかの如く、愕然として、今尚深い驚きの裡に沈んでゐる。將軍の自殺が与へた深い刺激の何ものであるかは、今尚不可思議なヴェールに包まれてゐる」（13）という状態が、

しばらくは続いたのです。人々を不意に襲ったこの衝撃に、どのような説明が与えられて日本社会に受け容れられてゆくのか、先はまったく見えていませんでした。

寺内正毅朝鮮総督は「大将が 明治天皇の崩御に當つて覚悟の自殺をして果てた心事に至りては、誠に立派なもので大に同情すべきに拘はらず、世間或は大將の自殺に対して種々揣摩憶測を逞しうして、精神錯乱の結果とか何んとかいふ愚説をする者あらば、誠に言語道断と謂はねばならぬ」(14)と発言しています。乃木の自決が「精神錯乱の結果」などと貶められるのではないかと危惧したわけです。豊島陽藏陸軍中将のように、「將軍の薨去に対して、種々の想像を挟み之に議論批評を加ふるが如きは最も不可にして、宜しく其死因動機等は一切之を國民の判断に一任すべきものなり」と述べる將軍もいました(15)。政府なり言論界なりが勝手な憶測で議論をしては、かえって乃木の死をおとしめることになるから、世論全体の判断を黙って受け容れるしかないと考えたのです。これから、乃木の死がどう評価されるようになるのか、誰にも先は見えていませんでした。こうした発言は、身内から殉死者を出した陸軍高官たちの間で、驚きと困惑が広がっていたことをうかがわせます。

実際、乃木の殉死に批判的な論説も、当初は登場しました。たとえば、『信濃毎日新聞』主筆の桐生悠々が書いた「陋習打破論」(九月十九日〜二十一日)は、「一般にもし殉死を善事とし、随つてこれを奨励し、随つてこれを実現せしむれば、君主の崩御とともに國家の功臣はことごとく死んで了わねばならぬ」といいます。さらに、「一國文教の源泉」である文部省が沈黙を保っているのも、殉死を容認できないためだとして、「満腔の同情」を捧げています。しかし、こうした乃木に批判的な記事には、読者から強い抗議が寄せられました。これに対して、『信濃毎日新聞』の九月二十七日付社説「丁髷時代に逆行」は、「憲法政治は輿論の政治である」にもかかわらず、「維新の際の遺物」である元老や「藩閥」が、「世が大正と一変するや「中略」ムクムク頭を擡げ出して来た」ことを嘆いています。なぜそうなったかといえば、「一人でも藩閥が減れば減るほど帝國々民の為には大利益である。然るに拘らず、世論は藩閥の減つたことを大に悲んで居る、常識を逸した悲み方と賞め方をして居る」からだと言います。名指しこそ避けられていますが、長州出身の乃木の死を指していることは明らかです。「輿論の政治」を支えるはずの國民が思い通りに動かないことに、桐生は憤りを持ち続けてましたが、これ以降

はこの問題に発言しなくなりませう。

こうして、「乃木大将夫妻の自殺に付ては、最早や論評する必要もないやうなものだ、一二異論を挟んだ者もあつたやうだが、天下の公論に任せられて、今では挙国一様に、其の悲壮なる最期に同情してをる」(16)という状態が現出します。陸軍首脳は乃木批判が起きることを危惧していただけで、文部省は沈黙を守っていました。乃木の死に対する熱狂は、あきらかに国民の側から盛り上がってきたのでした。このため、当初は批判的な記事を載せた新聞も、乃木を賞賛する記事しか出さなくなります。しかし、誰も予期していなかったが讚美すべき乃木の殉死に、どんな意義を見出せば良いのかについて、新聞雑誌ではさまざまな議論が繰り広げられていきます。

当初よく言われたのは、武士道の現れと見る議論です。日本社会に深く侵入した「墮落の傾向」を、武士道の精神が変えられることを、乃木大将は自決によって提起したという主張です(17)。しかし、桐生悠々が既に指摘しているように、そうだとすると、乃木以外の人間はなぜ乃木に続かないのかという問題が出てきます。そのため、乃木だけは例外的な徳を持つ人格であったとか、理窟を越えて感動的な行いであったという説明が登場します。しかし、死ななくても何の問題

もない人間が自決するという行為を、生きている側がそのまま認することはできないでしょう。乃木大将の殉死から当時の人々が受けた感銘を、論理的に説明することは至難でした。

乃木大将の殉死をめぐる議論を見ると、論者が強く意識している問題があります。それは、欧米諸国の評価であり、それを手がかりに欧米と日本とを比較するという観点です。当時の日本人には、非西欧世界で唯一西欧近代文明の導入に成功したという自負心と、それが日本の伝統を破壊しているという危機感を共に抱えていました。日本人の固有性とは何かを常に思い返さずにはいられたかったのです。それが、この問題にも大きな影を落としていました。

桐生悠々は、先に紹介した「陋習打破論」の中で、自殺を非とする「西洋人の説に賛成して、日本人の旧思想、旧倫理的思想に反対せざるを得」ないといいます。これとは反対に、肯定的な評価をする西欧諸国の新聞があることを「吾人の意想外」と述べ、このように「反響甚大」であるところに「大将の死の権威」を見ようとする者もいました(18)。こうした議論から、欧米から殉死は野蛮だと非難されることを内心恐れていたが、そうではなかったことに安堵している姿を推測できるでしょう。自決を否定するにしても、肯定す

るにしても、欧米での議論が大きな拠り所になっていくわけです。

他方で、乃木の自決にこそ日本の独自性を見出そうとする議論も多くありました。「外人側では乃木将軍の自殺が未だ腑に落ちぬらしい、又実際それが早速了解出来る位なら、ステッセルは降参もしなかつたらう、日本人は不可解な人間であるとは今もなほ外人一般の輿論らしい、併かし之れが却つて日本人の強い所以であるから、何も骨折つて理解して貰はうとする必要もあるまい」(19)といった論法です。一方で欧米の規準を取り入れながら、他方で日本人としてのアイデンティティを模索するという、日本が近代化Ⅱ西欧化する過程で常に直面した問題が、ここにも登場しています。この記事に登場するステッセルとは、乃木希典が日露戦役で攻略した旅順要塞の司令官です。このように、乃木はやはり日露戦役と深く結びついた人物でした。当時の日本で日露戦役を代表する将軍といえ、海軍の東郷平八郎と陸軍の乃木希典でした。東郷は海軍の全艦船を結集させた聯合艦隊司令長官として、海軍の作戦部隊の頂点にいました。これに対して、陸軍部隊の頂点にいたのは、五軍からなる満洲派遣軍の司令官だった大山巖です。乃木希典は大山の下にある第三軍の指揮官に過ぎません。しかし、大山ではなく、乃木

が陸軍を代表する将軍と見られました。これは、長期にわたって苦戦を強いられ、莫大な死者を出した旅順攻略戦を乃木が指揮したためです。東郷が日本海海戦の大勝利を導いた日露戦役の喜びを結びついた名将軍だったので、乃木は悲しみを象徴する存在だったのです。明治天皇の霊柩車に供奉した高官の一人衆議院議長大岡育造は、「大将は旅順の戦争で沢山の人を殺したので、常に父兄に済まぬと云つて居られたから、今度死なれたのも多分恚こゝろ云ふ事が自殺の原因になつたのであらう、其他に別に深い原因ともあるまい」と語っています。これに対して軍事参議官大島義昌大将は「自分もさう思ふ、さう云ふ事から明治天皇に殉ずる事にもなつたのであらう」と応じています(20)。乃木の自決を聞いて真っ先に思い返されるのは、旅順の犠牲者だという人が実は一番多かったようです。

この当時の日本にとって、白人キリスト教の大国ロシアと戦つて勝利を収めたことは、大きな誇りでした。これで日本は世界の一等国になったと信じていました。同時に十万人近くの戦死者を出したことは、深い傷となっていました。乃木希典は、日露戦役があつたがために、陸軍大将にまで上り詰め著名な軍人になりましたが、旅順攻略で多くの犠牲者を出し、二人の子息を戦場で失つてしまいます。そうした人物が、現代日

本の基礎を形作った明治天皇の跡を追って自らの生涯を終えたところに、日本社会が深い感動を示したといえるでしょう。

このため、新聞や雑誌に寄稿するインテリだけではなく、一般庶民もこのできごとに関心を示します。それは、九月十八日に行われた夫妻の葬儀の際に一気に表に現れました。参列者数は五、六万人と予想されていました。実際にはこれをはるかに上回り、「葬に会するもの廿万人／人臣として空前の盛儀」(21)といわれる葬儀になったのです。葬列の様子について、興味深い証言を一つだけ紹介しておきましょう。乃木の子息たちの幼なじみであり、夫妻と晩年まで交際があったため、親戚に準じた扱いで葬列に加わった長谷川正道の回想です。

「青山斎場に至る間の両側は人垣を以て埋め、前方の数列は土下座し十重二十重に群集は無慮二十万洵に前代未聞の光景であった。やがて進み来る將軍の靈柩を拝した群衆は敬虔なる態度を以て迎へ厳肅なる気持に肅として声なく、靈柩を見送る眼には、奇代の忠臣のその遺骸に対し最後の別れを致さんとする姿が反映して居り、筆者の胸を打った最も尊き感激であった。然るに次いで来れる夫人の柩、その間三十歩、その柩を

見た瞬間に群衆の態姿は一変し敬慕、愛惜、悉くが涙であった、合掌礼拝するもの、感極つて嗚咽するもの、涙を拭ふもの、土下座せる老媪は地に顔を摺り付けて慟哭する有様、沿道の総べてがそれであった。

棺側にあつてこの光景を見つゝ進む筆者は、一つ一つ胸に迫る衝動に、抑へんとして抑へ兼ねる涙が次ぎから次ぎへと込みあげて来る、漸く堪へてその場を通り過ぎると、又新たな同じ感激の場面に遭遇する、遂に我慢し切れずに涙は頬に伝つて落ちて来る。それを無理に堪らへんとする苦しさは今日尚忘れ兼ねる筆者が一生の尊き感激であった」(22)。

葬列を迎えた群集は、將軍の靈柩に「敬虔なる態度」を示したのに対して、夫人の柩には一変して「悉くが涙で」迎えたといえます。しかも、葬列が進むにつれて、沿道の人々が次々に同じような反応を示すことに、長谷川は深い感動を覚えていきます。当時の人々にとつて、夫と運命をともした静子夫人が大きな存在感を持つていたようなのです。乃木一人の自決ならば、それは遠くに仰ぎ見る偉人の悲劇的な最期という話に止まります。しかし、それだけではなく、二人の愛児を戦争で喪った夫妻がともに自決することで、乃木家が終焉するという家族の物語となりました。夫に黙って

つき従った妻の存在が、とりわけ女性にこの出来事をより身近に、より悲痛に感じさせたのでしよう。

神社創建

乃木の場合、廣瀬や橘のように銅像は建設されず、神社が創建されました。神社が出来ることで、乃木希典は文字通り軍神となったわけです。東京の旧乃木邸の隣に鎮座された神社を始め、日本全国の乃木に縁があった場所合計六カ所に乃木神社が、大正五年（一九一六）から昭和八年（一九三三）にかけて創建されています（23）。なぜ銅像ではなく神社造営の気運が高まったのでしょうか。それは、乃木が跡を追った明治天皇を記念するやり方と重なり合ったためと考えられます。明治天皇の場合も、個人の姿を生々しく再現するという、元来日本の伝統にはなかった銅像ではなく、神宮創建がふさわしいと考えられました。このために、大正九年（一九二〇）に明治神宮が創建されています。明治天皇第一の忠臣もそれに準ずるべきだと意識されたのでしよう。ちなみに、個人を神として祀り、その個人名を冠した神社が出来たのは、この時からです。また、廣瀬や橘は戦死者だから靖國神社に祀られました。乃木は靖國神社に入ることはできません。さらに、乃木の殉死によって乃木家は断絶していました。乃木とその一族の霊は、直接国民が祀る以外にはあり

得ないと一般に考えられたのでしよう。

昭和に入ると、廣瀬武夫と橘周太を祀る神社をそれぞれの出身地に創建する申請が出されますが、各地に作られた乃木神社に影響された面もあるように思えます。また、昭和に入ると、十一月三日の明治天皇誕生日が明治節という祝日となり、陸海軍記念日の式典が大規模になるなど、栄光の明治を盛大に祝おうとする動きが出てきます。その偉大な時代に活躍した軍神を、彼らの生まれ育った郷里で祭礼したいという意識が、地元で芽生えたのではないのでしょうか。

廣瀬神社は、日露戦役戦捷三十周年に当る昭和十年（一九三五）五月に鎮座されています。興味深いことに、かつて銅像建設を熱心に進めた廣瀬の同期生財部彪大將は、この時神社創建に水をさすような発言をしています。彼は、「二人人間が神様になると云ふのは、人間が之れを拵へてさう云ふことをやつても到底駄目である」といいます。単に彼一人がそう思うだけではなく、兵学校の「同窓生の間でも段々研究して」「皆の意見が一致」したとのこと。その結果、かつて東京でも神社創建の話があったが、「どうも人が強ひて神様を作ると云ふやうな感じがしてならなかつた」ために、これを退けたといっています。それゆえ、竹田町の関係者が神社創建の話を持ってきたときも、神様に

祀ることは「自然に出来るものであつて人が拵へるべきものでない、若し失敗するやうな事があれば故人の徳を毀けるものである」といつて反対しています。しかし、その関係者は独力でもやり遂げると決意を示し、遂に廣瀬神社の創建が実現した。「其の経緯を考へてみますと、廣瀬中佐の事蹟と云ふものは、日本国民の各個人の心の琴線に触れるものが多少あつたものと思はれます」と財部は見ます。結局、「吾々は屢々神社創建に水をさして来たが、今日遂にかうした立派な神社が建られた事は無理のない極めて自然的な成行であると思ふ」と述べています(24)。

銅像を造るのは、西洋伝来の偉人顕彰のやり方です。ここまでは、財部も当然やるべきことだと考えました。しかし、廣瀬を文字通り神様として祀ることに、廣瀬の人となりをよく知る財部を始めとする同窓生は、強い抵抗感をいただきました。そして、あえて鎮座祭というめでたい場で、このように述べたのは、廣瀬が日本の神様の一員になることに、まだ違和感があつたからなのでしょう。廣瀬を郷土が生んだ英雄と敬う人々を核にして、彼を神に祭り上げようとする動きがわき上がり、財部がいだいたやうな懸念を押し切つて神社が造られたのです。

こうして、日本を世界有数の大国にさせた日露戦役

の英雄は、神社に祭られるのが当然であるという意識が、昭和期の日本社会に拡がつていきます。すでに、乃木希典と廣瀬武夫の神社があるので、東郷平八郎と橘周太も神社が造られるのは必然でした。昭和九年(一九三四)に亡くなった東郷は、晩年に神社を建てたいという話を聞いて、「なにッ、わしを神様にするのか!もつてのほかでござす」(25)と断つたといいますが、もはや本人の意志など問題ではありませんでした。紀元二千六百年にあたる昭和十五年(一九四〇)、東郷神社は東京原宿に、橘神社は橘の郷里長崎県千々石町に鎮座されています。

このように昭和期に入ると、軍神に対する扱いが大きく変わってきましたが、それと同時に、新しい形の軍神が注目を浴びるようにもなります。年長の将校が部下を思いつつ死んでいくではなく、若者が集団で作戦成功のために進んで命を捧げるといふパターンです。その先駆けとなつた爆弾三勇士を、次に見てゆきます。

五 作戦に命を捧げた若者たち

爆弾三勇士への熱狂

昭和六年(一九三一)九月十八日に勃発した満洲事

変は、翌年に入ると上海に飛び火し、二月には同地に派遣された日本陸軍と中国第十九路軍との間で激しい戦闘が行われました。戦況が連日報じられる中で、二月二十四日の新聞各紙は、我が身を犠牲にして敵の防禦線突破を図った三名の工兵、江下武二、北川丞、作江伊之助各一等兵の活躍を大きく報じました。『東京朝日新聞』によれば、頑強に張り巡らされた鉄条網に前進を阻止された時に、「わが工兵隊の工兵三名は鉄条網を破壊して敵陣の一角を切崩すため爆死して皇軍のために報ずべく、自ら死を志願し出たので、工兵隊長もその悲壮なる決心を涙ながらに『では国のために死んでくれ』と許したので、右三人は今生の別れを隊長始め戦友等に告げ身体一ぱいに爆弾を巻きつけ点火して『帝国万歳』と叫びつゝ飛だして行き深き四メートルの鉄条網に向つて飛込んで直に壮烈無比なる戦死を遂げた、これがため鉄条網は壊れ大きな穴が出来敵の陣地の一部が破れ、これによつてわが軍はこゝより敵陣に突入するを得」たというのです。「この三工兵の鬼神をも泣かした爆死は往年の日露戦争における旅順港閉塞船の決死隊以上の悲壮の極みで万に一つの生還を期せず必ず死すの拳にして、これを聞いた師団長始め戦友等は涙を流して、その最期を弔ひ『帝国なほ亡びず』の感に打たれた」とも報じられています。

点火した爆弾を身につけた三名の工兵が、一身を犠牲にして鉄条網を破壊したというのが、第一報の中身でした。三名からの志願を隊長が許可したこと、「万に一つの生還」も期していなかった点で、旅順閉塞隊を上回る「悲壮の極み」であること、「帝国なほ亡びず」と感じ入った師団長以下の仲間が涙を流して弔ったことが、指摘されています。その後「肉弾三勇士」あるいは「爆弾三勇士」として喧伝されるようになった逸話の核心は、これらの点にありました。

満洲事変が始まってからの日本軍将兵の奮戦振りや戦死の様相を、マスメディアは連日大きく取り上げていました。たとえば、聯隊長という要職にありながら、圧倒的な数の敵に囲まれながら奮戦し、死んでいった古賀傳太郎中佐は、新聞報道だけではなく、映画が作られたり、ラジオで追悼講演が放送されたりしています。あるいは、大隊長の戦死として大々的に報じられた後、瀕死の重傷を負ったところを捕虜となっていたことが判明し、日本側に引き渡された二日後にピストル自殺を遂げた空閑昇少佐も著名でした。これを『読売新聞』（三月二十九日）は「上海事変最大の悲劇」と報じており、映画や芝居の題材になりました。三勇士もその一つとして報じられたのです。他にも数多くの将兵の戦死が美談として報じられましたが、その中

では三勇士に対する国民の反響が圧倒的に大きかったのです。新聞報道からわずか一週間後には、三勇士を主人公にした四本の映画が封切られ、三月中だけでも他に八本が上映されています。また、新聞各紙は三勇士の歌を募集し、三月二十九日にはラジオでこれらが一斉に放送されています。また、舞台劇がラジオ中継されたりもしています。死ぬことが分っているのに、二十歳過ぎの平凡な若者が集団で作戦を遂行する姿を思い描いて、涙を流すというのが、多くの人々の反応でした。たとえば、三勇士の出身地にある高等女学校の生徒は次のように書いています。

「全然実に万に一つも生きる術、望みはないのですもの、此の強さを大和魂の発露だと云はぬ人はないでせう。「中略」是を或る方面から見たら無謀だとも狂的だとも見られませう。ですが其の場合そうせねばならぬ、或る偉大な何ものかの力が三勇士の身体に心に閃いたのでせう。「中略」生とし生ける者で一人として長命長寿を希はぬ者はありません。それを思ひきつた。こう云へば一口ですが、其の覚悟をするまでの本人の気持。三勇士が最後まで自己を問はずに偏に君国を思つた其の崇高な心根には誰でも涙なくして考へる人はありますまい。「鬼神も泣く」とは三勇士の行為に対

してのみ適當だと考へられます。魂ある人はどんな人でも百人が百人、千人が千人、誰でも泣かぬ人はありません。涙を流さぬ人はありません。此の涙、あついい清い涙、これこそ私達の真情のシムボルとも云ふべきものです。感激の涙です。美しい涙です」(26)。

廣瀬武夫や乃木希典の場合と同様に、本人の心持ちを思いやって皆で涙を流すのが、日本の軍神でした。そして、日本国民が三勇士のような覚悟をすれば、難局は打開できるとみます。小学校六年の男子児童は「今又米国が日本に向つて戦争をしかけようとしてゐる、「中略」ばかりでなく場合によつては世界の強国全体を相手に戦はねばならぬ様になるかもしれぬ。そんな大問題が起つた場合には、吾々国民は老いも若きも此の三勇士の精神を以て精神とし、義勇奉公の実を挙げねばならぬ」(27)と覚悟します。先程とは別の高等女学校生徒も「あなたのやうな忠烈な軍人の居る日本は外国と戦つても必ず勝ちます。米国が何です。英国が何です。私達のかよはい腕でも日本は護ります」と健気な決意を披瀝しています(28)。

陸軍工兵の異議

しかし、このような三勇士像は、軍隊という組織のあり方から見て、大きな問題を抱えていました。この

ことを当時指摘したのが、陸軍築城部本部部員を務める陸軍工兵中佐小野一麻呂でした。彼は三勇士の戦死した過程を詳細に調査しました。そして、三勇士同様に点火した爆弾筒をかかえて走った兵士がもう一組いたこと、そして彼らは無事帰還したが、三勇士は途中で銃撃されいったん倒れたために、目標地点に着くが遅くなり、爆死したと指摘します。「一組は悉く殲れてしまい、一組は皆健かである之れ全く天命と謂ふより外ない」(29)と彼は言います。つまり、間違いない死ぬ作戦を、志願を募って決行したわけでもないし、上官が強要したわけでもない。通常の作戦遂行を命令したところ、たまたま戦死者が出たに過ぎないと見ているのです。一般に広がった三勇士像において、上官の命令には絶対服従するという軍隊の常識が覆されている点に、彼は最も大きな違和感を持ちました。

「此の選に当つた勇士は各々決死隊の応募者である様に演劇、映画、文献に於て見たけれども予は甚だ不審とした所であつたのである。出征した軍隊は之れ悉く決死隊である。何ぞ其上に決死隊を募る要があらうか。出征する者も亦之を送る者も互に生還を期せない覚悟であるべき筈である。それなのに我が帝国軍隊が危険の任務に当るに際し一々志願を求めなければ之れに当

るものがない様になつたならば国軍の破壊が近きに迫つた秋ではあるまいか。「中略」今回の破壊班に加はることが出来なかつた兵士や其の家族の人々が斯かゝる劇又は映画等を見たとしたならば何んと感ずるだらうか」(30)。

多くの人が三勇士の死に感動したのは、死ぬことが分つていたのに、作戦の成功のために進んで我が身を捧げた点にありました。しかし、上官の命令に従つただけだとすると、生きのびる可能性が皆無の行動を強要されたに過ぎなくなり、その上官はあまりにむごいとみられるでしょう。それゆえ、自らの志願という要素がどうしても必要となります。しかし、そうになると、上官に絶対服従する軍隊組織の原則に反することになります。同じ命令を受けた二組の内、一方が三勇士となり他方は無事生還しているのですから、上官は決して万死の作戦を強制したわけではありません。そう見ると、数多くの他の戦死者との違いはなくなり、三勇士だけを取り上げて、ここまで大騒ぎをする理由は見当たらずに、小野も三勇士を帝国軍人の典型と見るだけで、他の軍人とことなつた資質を持つとはとらえません。それゆえ、彼は三勇士だけが称賛される理由を、「天の命ずる所に外ならない」としか説明

できないのです。

このように、陸軍は極力正確な調査を行い、その結果を率直に公表しています。しかし、いったんはずみのついた世論は、最初に受けた衝撃と感激を、その後には得られた情報によって冷静に見直して修正しようとはしませんでした。言論界でも、勇士は三人に限らない、鉄条網を破壊する作戦に参加した全員の三十六勇士である、あるいはこの作戦で戦死した工兵七名と工兵隊から出たもう一人の戦死者を合わせて八勇士であるといった議論も登場しますが、三勇士というイメージが揺らぐことはありませんでした。つまり、「爆弾三勇士」とは、陸軍が戦意昂揚のために創り出したのではなく、国民が膨らませたイメージだったのです。

爆弾三勇士を顕彰する方法としては、廣瀬武夫と同様に、銅像の建設というやり方が取られました。三勇士が所属していた工兵第十八大隊の所在地・福岡県久留米市に建てられたものと、東京芝の青松寺前のもので二つです。前者は久留米市長や久留米商工会議所会頭などが中心になって、後者は十名の貴族院議員が発起人になって、それぞれ寄附金を募って建立されています(31)。これまでの銅像と同じように、陸海軍は直接関与せず、民間主導で作られています。ちなみに、工兵第十八大隊にも記念物が建設されました。三勇士

を生んだ戦いで戦死した工兵八名の偉勲を伝えるための「上海事変爆破勇士記念塔」です(32)。つまり、工兵大隊としては、三勇士だけではなく同じ作戦で死んだ他の五名も、命と引き替えに鉄条網爆破を成功させた点で、同様な貢献をしたと判断していたわけです。

六 おわりに 軍神の三類型

爆弾三勇士の登場を以て、最初に掲げた軍神の三類型はすべて登場しました。以後何人もの軍神と呼ばれる軍人が出ますが、この三類型から大きく外れる例はありません。そこでそうした人々にも触れながら、近代日本の軍神たちの特徴と変遷について、まとめておきます。

軍神に共通するのは、戦いの最中なのに、心浮き立つ栄光の武勇談よりも、涙に縁取られた物語が好まれた点です。関心の焦点は、敵との戦いぶりよりも、戦死してゆく軍人自身の心持ちの方にありました。つまり、有能な軍人として、いかに大きな戦果を挙げたかという敵との関係よりも、涙ながらに語られる日本人自身の美質が注目を浴びたのです。中には、昭和十二年(一九三七)八月渡洋爆撃に参加し、中国揚州で撃墜された梅林孝次郎海軍中尉のように、炎に包まれた

機上からハンカチを振りながら僚機に別れを告げただけで、国民の大反響を呼び、軍神と賞賛された例もありません。日本人は泣きながら戦争をしていたという感慨がわいてきます。大戦果をあげて、軍神として崇められたのは、近代日本では、日本海海戦の東郷平八郎と真珠湾攻撃の山本五十六くらいでしょう。その山本五十六も、最後は搭乗機が撃墜されて戦死するという悲劇的な最期によって、軍神となりました。軍神とは、輝かしい勝利によって戦意を昂揚させる手だてとなるというよりも、涙によって日本人のすぐれた資質を確認する存在であり続けたのです。

大きな作戦の司令官を務め、その結果として軍神になった將軍には、旅順攻略をした乃木希典、先に挙げた東郷平八郎と山本五十六がいます。このうち、明治天皇に殉死することで、乃木が乃木神社に祀られて軍神となります。東郷は天寿を全うしたのですが、乃木と常に比較される存在だったために、神社に祀られる神となりました。山本も昭和十八年（一九四三）に戦死した後、神社創建の声もありましたが、戦時中故に巨大なコンクリート製の像が作られるにとどまりました。

次に廣瀬武夫や橋周太という明治の軍神と、爆弾三勇士という昭和の軍神の違いをまとめておきます。

廣瀬や橋が戦闘現場で部隊を指揮する立場にあったのに対して、三勇士は兵卒に過ぎません。現場の指揮官の役割は、状況に応じて適確な判断をするところにあります。これに対して、兵卒は上官の命令を忠実に実行する存在にすぎません。それゆえ、ある軍人の独自の判断をすばらしいと称賛するのは、指揮官に対してならば可能でしょうが、兵卒の場合はほとんどその余地はありません。三勇士の場合、この部分が一人歩きし、小野中佐が指摘するように、軍隊の原則からはずれたイメージが作られてしまいました。

明治の軍神の内、廣瀬と乃木は士族出身、橋は庄屋の家系という、どちらかといえばめざまれた階層の出身で、将校を職業として選んでいます。そして、軍神となる前から、その人柄によって一目置かれる存在でした。最後に戦場の指揮官として、部下の前で至情あふれる行動をとって軍神となりましたが、意図して戦死したわけではありません。乃木は自決でしたが、旅順攻略戦で、自分の息子を含め多数の将兵を死なせた重荷を背負って死んでいったと、一般には解釈されました。彼らが自分の部下と強い絆を持って死んでいったことに、残された者は悲しみを深くかき立てられています。部下とのつながりは家族関係に擬せられ、中年以上の年齢であった彼らは、父親のように仰ぎ見ら

れる存在でした。

これに対して、三勇士はみな戦死する前年の一月に徴兵によって入営したばかりの一等兵でした。生前には特に目立つところのなかったごく普通の青年たちです。そんな若者が三人一緒になって、これからという人生とひき替えに、目前の作戦を成功に導きました。そうした極限の自己犠牲が、人々の感動をさそつたのです。そして、彼らの死後は母親たちが注目を浴び、立派な母親の良き息子たちとしてほめたたえられました。

中年以上の指揮官か若き兵卒か、個人か集団か、思いがけない死か作戦成功とひきかえの覚悟の戦死か、という違いが両者の間にはありました。こうした変化は偶然の産物だったのかも知れません。廣瀬も三勇士も戦争が始まった直後に登場し、戦いの最中にもかかわらず、多くの国民が泣きました。つまり、極論すれば人々は感動して泣くことができるような人格の登場を、無意識のうちに求めており、それがたまたま廣瀬であり、三勇士であったともいえるでしょう。

そこに時代意識の変化を読み取ろうとするならば、まだ、封建時代からの社会階層が厳然として残っていた明治期には、選ばれた立派な人物の崇高な行為を仰ぎ見るという視点が一般に好まれました。これに対し

て、江戸時代に生を享けたものがほとんど退場し、大衆社会化がすすんだ昭和初期には、ごく平凡な日本人が究極の自己犠牲を達成することの方に、より強く共感したという違いがあったのかも知れません。昭和七年という時点では、古賀聯隊長や空閑少佐よりも三勇士が好まれたのです。彼らは、もともと「豪傑偉人」の一員だったわけではなく、「私達と同じ棟続きに住む且つ同じものを食べてきた平凡な隣人である」。それゆえ、「隣の家から出た英雄」のような「驚きと親しみ」の両方を感じさせるといふ指摘⁽³³⁾もありました。自分たちの仲間から登場した英雄という側面が、三勇士への共感を支える大切な要素だったので。

変化の理由はこうなのだと言断することはできませんが、昭和の初めに三勇士という新しい軍神像を生み出したこと自体は、その後の歴史に大きな影響を与えました。明治の軍神たちの物語では、偉人を主役とする哀愁に満ちた話に人々は泣きましたが、そこから分りやすい教訓が得られるわけではありません。彼らの人格は容易にまねできるものではないからです。これに対して、三勇士は傑出した人格ではなく、具体的な行動によって注目を浴びました。国民は、自分たちと同じような普通の人間による究極の自己犠牲を目の当たりにして、涙を流しました。このような行動は日本

人ならば誰にでも出来るはずである、三勇士の偉大さは、自らの決断でそれを実行に移した点にあると受けとめられました。

三勇士型の軍神が次に登場するのは、昭和十六年（一九四一）十二月の真珠湾攻撃の時です。特殊潜航艇で真珠湾に行き、全員が未帰還となった将兵が、「九軍神」となったのです。ちなみに、二人乗りの潜航艇五隻による作戦だったのですが、一人が初の米軍捕虜となつたため、その詳細を公表しないままに、九軍神と称されました。当時「特別攻撃隊」と呼ばれた部隊によるこの作戦では、大型潜水艦が帰還のために待機していましたが、出撃前から戦死を覚悟しており、実際そうなつたことが、大反響を呼んでいます。このように、三勇士から始まり九軍神に引き継がれた精神が、戦争末期の特攻作戦につながつたといえるでしょう。

注

- 1 『小林秀雄全集』第七卷（新潮社、平成十三年）二〇四頁
- 2 井田麟鹿編『七生報国廣瀬中佐』（廣瀬家、昭和三年）三頁
- 3 『戦中派虫けら日記』（ちくま文庫、一九九八年）一三五―一三七頁

- 4 『国民新聞』明治三十七年二月二十九日
- 5 『東京朝日新聞』明治三十七年三月三十日
- 6 『讀賣新聞』明治三十七年四月二日
- 7 『東京朝日新聞』明治三十七年四月十四日
- 8 『万朝報』明治三十七年四月十四日
- 9 『報知新聞』明治四十三年五月二十九日
- 10 江崎惇『遼陽城頭夜は開けて』（スポニチ出版、昭和五十六年）二二―二一三頁
- 11 『東京日日新聞』大正元年九月十四日号外
- 12 『報知新聞』大正元年九月十七日
- 13 『太陽』大正元年十月
- 14 『国民新聞』大正元年九月十六日
- 15 『万朝報』大正元年九月十六日
- 16 『読売新聞』社説大正元年九月十八日
- 17 たとえば、『日本及日本人』大正元年十月一日別冊
- 18 『日本及日本人』大正元年十月一日
- 19 『読売新聞』大正元年九月二十二日
- 20 『報知新聞』大正元年九月十六日
- 21 『万朝報』大正元年九月十九日
- 22 長谷川正道『敬仰乃木將軍』（宮越太陽堂書房、昭和十七年）三三七―三四〇頁
- 23 乃木神社ホームページ
- 24 『豊州新報』昭和十年五月二十四日

- 25 佐藤国雄『東郷平八郎元帥の晩年』（朝日新聞社、一九九〇年）二三五頁
- 26 江頭伊三太編『肉弾三勇士略伝』（長崎県北松浦郡 教育会、昭和七年）九九頁
- 27 同前、七九頁
- 28 同前、八八頁
- 29 小野一麻呂『爆弾三勇士の真相と其観察』（小野一麻呂、昭和七年）三二—三三頁
- 30 同前、一九—二〇頁
- 31 國防義会編『爆弾三勇士』（同会、昭和八年）古川誠助編『肉弾三勇士銅像建設会報告』（同会、昭和十一年）
- 32 『福岡日日新聞』昭和八年五月八日
- 33 『婦人世界』昭和七年四月

シンポジウムにおける質疑応答

事前に用意されたコメントと、それに対する回答文は以下の通りである。コメントは要旨のみを記した。文責は山室にある。

(一) 数多くの日本の軍神を、三つの類型だけで説明できるのか。また、検討対象が日露戦争期に偏り、後半の時期が単純化されている。

私は『軍神』という著書の中で、多くの軍神を取り上げました。その分析の結果、ここで紹介した三つの類型が基本になるという結論に至りました。この三つを押さえておけば、それぞれの軍神が持つ共通性と特殊性を十分に把握できると判断したのです。残念ながら、今回は時間の制約から、研究の結果しか示せず、その前提を十分紹介できませんでした。

近代日本が経験した戦争の中でも前半に偏っているのは、後半に登場する軍神の多くが、前半の軍神を模倣しているからです。

(二) 軍部とマスメディアの役割が過小評価されていないか。また、陸海軍間の対抗意識を積極的に評価すべきではないか。

戦争が始まると、新聞や雑誌は連日戦死した軍人の美談で溢れかえりました。軍はその材料を数多く提供しましたし、マスメディアも熱心に取材をして記事にしました。そうした報道が次々に供給される中で、国民からの反響が突出して大きかった、ごく例外的に少数の軍人が、特に軍神と呼ばれました。事前にはどの話が大ヒットするか、誰にも分からなかったのです。やはり、軍神を選んだのは国民だといえるでしょう。

ただし、昭和十二年（一九三七）以降中国での戦争が本格化すると、軍は意識的に軍神を生み出そうとし始めます。これまでの軍神と似たタイプの戦死軍人を、最初から「軍神」として積極的に称揚するようになるのです。優れた人格や技量を持ち、最新兵器である戦車や戦闘機を操縦しながら戦死した西住小次郎陸軍大尉や南郷茂章海軍少佐などがそれに当ります。しかし、国民からの反響は、廣瀬中佐や爆弾三勇士に比べて、はるかに地味でした。

さらに、アメリカとの戦が始まると、海軍は爆弾三勇士に似た軍神である「九軍神」を登場させ、その直後に陸軍も「隼」という名の最新戦闘機の飛行部隊長として戦死した加藤建夫陸軍少将（中佐から二階級特進）を軍神とするキャンペーンを行っています。加藤少将は廣瀬・橘両中佐の系譜に属する高潔な人格を有する軍神でした。報告で触れたように、日露戦役開戦直後に注目を浴

びた廣瀬海軍中佐に対抗させる形で、橘陸軍中佐が登場しました。加藤少将も、九軍神に対する同様な意識に支えられて生み出された軍神といえるでしょう。

これらの軍主導で登場した軍神への国民の反響の度合いには大きな差があり、九軍神が圧倒的に大きな支持を受けています。陸海軍の関係でいえば、廣瀬中佐と九軍神で海軍が圧勝し、乃木将軍と爆弾三勇士で陸軍が脚光を浴びましたが、これは結果論に過ぎないように思われます。

このように、後半になると軍が先導する傾向が強まりますが、それにしても、涙で縁取られない陽性なイメージというような、これまでに類例のない新しいタイプの軍神を、軍が作ることはありませんでした。国民が創り出してきたパターンを、軍が模倣して繰り返したに過ぎない点は、注目すべきでしょう。(なお、昭和十二年に始まった中国での戦争は、長期化するとともに、国民の戦争熱に陰りを生じました。だから、なおのこと戦意昂揚のために、軍部は軍神を作り出そうとしたものと思われれます。以上括弧内は当日の補足です)

(三) 爆弾三勇士に対する工兵中佐一人の意見が、陸軍全体を代表しているとは思えない。

陸軍としても調査を行い、その概要が新聞報道されています。その内容は工兵の見解と一致していません。詳しく

くは、拙著を御覧下さい。ただ、陸軍関係者の中では、小野一磨呂工兵中佐の著作が最も詳しくかつから引用したまです。小野工兵中佐を含め陸軍関係者全員が、国民の戦意昂揚を強く望んでいましたが、虚構をでっち上げてだまそうとはせず、できる限り正確な情報を国民に伝えようと努力したのです。爆弾三勇士という軍神は、やはり国民の主導によって誕生したといえます。

(四) 日本の軍神の特徴は、日本のみの特徴なのか。

他国との比較は今後の課題ですが、アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトは、戦時中に執筆した『菊と刀』(一九四六年)の中で、次のように語っています。

「日本の小説や芝居では、ハッピーエンドはかなり稀である。『中略』日本の現代の戦争映画も同様の伝統を守っている。映画を鑑賞したアメリカ人は往々にして『今までに見た反戦映画の中で最高の作品だ』と評する。これはアメリカ人の典型的な反応だ。なぜなら、それらの映画はもっぱら戦争にともなう犠牲と苦痛を主題としているからだ。」(角田安正訳「光文社、二〇〇八年」三〇五―三〇七頁)

ここで指摘されている日本の戦争映画の世界と日本の軍神の世界は、共通の精神土壌から生み出されたといえ

ます。そして、そうした姿勢で戦争を支えることは、少なくともアメリカ人には理解しがたかったようです。アメリカと比較する限り、日本の軍神の特徴は日本的といえるでしょう。

当日出た主な質問とそれへの回答は以下の通りである。文責は山室にある。

(五) 歴史に真相がないとは、どういう意味か。
そこに書いた通りの意味である。

(六) 軍神を創り出したのが国民であるという時の国民とは、どのようにして作られた存在か。

明治以降、戦争を経験することで一体化していった国民である。軍神を生み出す経験を通して作られたといっても良い。

(七) 国民が軍神を作ったというが、新聞に書かれていることに依るのならば、結局新聞の言い分を認めているだけではないか。

その通りである。しかし、新聞は売れなければ商売として成り立たない。売れるためには、読者が好みそうな記事を書くしかない。その意味で、読者の興味がそこに反映しているといえるだろう。

(八) 軍神は教科書でどう扱われたのか。

軍神が出た結果、それが教材として採用された。軍神教材があったから軍神が出たわけではない。その順番に注意してほしい。

(九) 軍神は登場した後に、扱いにどんな変化があったか。

廣瀬武夫の銅像が象徴的である。デモクラシーや社会主義思想が入ってきた第一次世界大戦後には邪魔物扱いされたが、満洲事変とともに、たいへんよく整備された。時代の風潮とともに変化する存在であった。

(十) 一人の指揮官が無念の最期を遂げるというタイプと複数の兵卒が作戦の成功と引き替えに自らの命を捧げるというタイプがあるというが、その組み合わせが変わる場合はあるのか。

基本的に同じタイプの繰り返しである。

(十一) 韓国戦争(朝鮮戦争を韓国ではこう呼ぶ)の際に、韓国でも日本の軍神に似た英雄が登場したが、それをどう評価するか。

健気な死に方をした軍人に涙を流すという軍神ならば、日本と似ている。アメリカとは異なり、日本と韓国では似た価値観を共有しているのである。その価

値観は、日本の場合、近代以前からの伝統としてあることに間違いはない。そうだとすると、韓国の場合には、日本の影響でできたのか、独自の文化として昔からあったのかは、今後の研究課題であろう。

(これに対して、別の報告者から、韓国の場合には悲しみを最後には克服するという点に特徴があるとのコメントがあった。)

(十二) 朝鮮半島出身の特攻隊員の評価をどうするか。

日本人とともに、同じように死んでいったのだから、日本の規準に従っているにしても、日本と朝鮮との一体感を形作る効果をもたらしたと考える。さらにいえば、満洲にいた朝鮮農民から見れば、満洲事変における日本軍の行動は大に支持できた。当時は日本人と朝鮮人は「同胞」であるという記事が、新聞にも掲げられている。ともに同じ戦争を経験することによって、両者の一体化が進んだのは間違いない。

参考文献

- 山室建徳『軍神』(中公新書、二〇〇七年)
 山室建徳「国定教科書が描く戦争と歴史」『メディア史研究』21、
 二〇〇六年)